

信州ゐのはな会

熊谷 信夫

「信州ゐのはな会の歩みと今後」

長野縣猪鼻會の頃

平成18年秋、我々の会誌「亥之鼻 信州」を創刊するにあたって、昭和63年に前支部長の故百瀬孝雄先生（S6卒）から引き継いだ書類を改めて調べたところ、その中に表紙が黄ばんだ一冊の大学ノートがあって、表題は「長野縣猪鼻會記事」と書かれており、昭和27年12月7日に常置幹事の山崎義男先生（M44卒）が諏訪市茅野病院へ出張の折に、前幹事の茅野要治先生（T12卒）から、金13,501円とともに引き継いだとの記載で始まっている。しかし残念ながらそれ以前の記録は全く残されていなかった。

まず、第41回総会が昭和28年11月2日に千葉から佐々木哲丸（小児科）・竹内勝（S6・皮膚科）、小林龍男（S7・薬理）の3教授を招いて、志賀高原の麓の上林温泉で開催されたと記録されており、会員数は長野市19、松本地区16、諏訪地区12を主にし、合計137名（千葉薬学専門学校の卒業生も含めて）を数え、また維持会費は100円と続いている。

さて、ここで往時を振り返ってみると、昭和28年の総会が第41回と記載されていて、総会が毎年開催されたとして逆算すると、第1回は1913年（大正2年）ということになり、現在までに実に約100年の歴史を持つことになる。千葉医学専門学校以来の多くの先輩が激動の大正・昭和を通して、広く長野県下の医療を背負いながら、この会を維持してきた意気とエネルギーに感動してキィを叩いている。

因に私の郷里の長野県南端の辺鄙な農村にも、昭和10年代に加藤玄省先生（M41）が開業しておられ、馬に乗って往診される姿を見かけたこと、また校医も兼務されており、腸チフスの予防注射を背中に打たれて、接種後の疼痛と発熱に悩まされたことをはっきりと覚えている。

一方、昭和25年頃春休みを利用して、庭球部の学生として寄付をいただきに、県内の先輩を訪問したことがある。当時は現在のようにOB会の組織ができていなかったため、ある先輩を訪ねると次々にかつての仲間を紹介してくださった。まず松本の故百瀬孝雄先生（S6・松本国立病院長）から長野市の

故桑原春雄先生（S5）へ、さらに汽車に乗って県の北端に近い残雪が残る牟礼村に、故丸山吉夫先生（S3）を訪ねて、快くご寄付をいただいたことが思い出される。これらの事実から、多くの「ゐのはなの先輩」が県下の南北両極をも含めた各地で、広く医療を担当しておられたことが容易に推測される。

第42回総会は昭和29年11月6日、千葉から河合直次（一外）、柳沢利喜雄（S5・公衆衛生）、鈴木次郎（S14・整形）教授、花岡和夫同窓会理事長（後の第五代ゐのはな会長、M44・諏訪出身）を招聘して、飯田市の天竜峡で開催。第43回は翌昭和30年10月29日に河合、齊藤十六（二内）、宮木（薬学）、三輪清三（S6・一内）教授を招聘して、諏訪で開催。当時の会員数129名と記載されている。

同様に第45回は昭和32年10月12日、齊藤（二内）、福沢（薬学）教授、花岡理事長をお招きして松本で開催。会員数は159名とある。第46回は昭和33年11月3日、鈴木（S14・整形）、笥（放射線）、湊（薬学）の3教授を招聘して長野市で開催、参加会員24名。この会に私も故森川先生とともに初めて出席して、末席を汚した記憶が残っている。

中興の祖

当時県下の主な地区ではそれぞれ10数名の会員が活躍しており、地区ごとに「ゐのはな会」が開かれたとの記録もあり、総会は各地区の回り持ちで開催されている。また上記のように会員には千葉薬学専門学校の卒業生（10名前後）が含まれているので会員数も多く、また薬学の教授も必ず招聘されている。この総会の後、当時の支部長であった長野市の故丸山止戈夫先生（T14）が病に倒れたため、残念なことに会の活動は一時休止状態となる。

しかし47年4月から52年4月までの間は故百瀬孝雄先生によって10名の会員の逝去に際して、ゐのはな会としての弔慰を捧げられたと記されている。さらに52年に、先生は中信地区の有志を募って、「ゐのはな会長野県支部」を再興され、同年6月19日に第47回の総会が千葉大学長香月秀雄学長（S16・肺外）、信大加藤学長、小穴松本市医師会会長を来賓と

して迎えて松本で開催された。

その後先生は63年まで支部長として、3年ごとに総会を開いて会の運営を盤石のものとされた。先生のこのお力なくしては今日の「信州ゐのはな会」はなく、中興の祖と崇めておりましたが、残念ながら平成11年1月に100歳まぢかのご高齢で天寿を全うされました。33年の記録にも残されているように、総会の懇親会の席で何時も披露される、先生の「マジック」は玄人はだしで、満場の喝采を浴びたものであります。先生のご功績を讃えてご冥福をお祈りいたします。

総会は長野または松本で3年ごとに開催され、来賓として教授と同窓会役員に、記念講演と同窓会報告をお願いしておりますが、記念講演をいただいた先生は教授、同窓会役員の方は先生と記載すると、各回の来賓のご芳名は下記のとおりです。第48回（55年3月）、重松教授（S38・信大病理）、井出源四郎先生（S19・医学部長）、奥井勝二先生（S28・一外・ゐのはな編集長）、島田裕先生（S35・解剖1）、塚原茂雄先生（S36・信大眼科）。第49回（58年7月）、渡辺昌平教授（S20・肺内科）、小島莊明教授（S40・信大寄生虫）、小林金市先生（S8・同窓会会長、岡谷）、井出源四郎先生（千葉大学学長）。第50回（61年7月）、足立恵美子教授（S37・眼科）、井出源四郎先生（学長）。

信州ゐのはな会と井出先生

総会は会員が長野・須坂地域に偏在してきたため、主として長野で開催され、各回の来賓のご芳名は下記のとおりです。第51回総会（昭和63年6月）——熊谷支部長を引き継ぐ——守屋秀繁教授（S42・整形）、井出先生（学長）。第52回（平成3年6月）新見仁男教授（S33・小児科）、井出先生（ゐのはな会副会長）。第53回（6年7月）——年会費は2,000円に据え置き、80歳以上免除——木内政寛教授（S39・法医、飯山）、井出先生（ゐのはな会第十一代会長）。第54回（9年5月）、原田順和部長（S53・長野県こども病院心血管外科）、井出先生（会長）。第55回（12年6月）——会の名称を「信州ゐのはな会」に改称——藤沢武彦教授（S42・肺外、三水村）、井出会長。第56回（15年7月）、重松秀一教授（S39・信大病理）、井出先生（ゐのはな会名誉会長）。第57回（18年6月）、佐伯直勝教授（S50・脳外）、小幡裕先生（S28・ゐのはな会副会長）。第58回（21年5月）宮崎勝教授（S50・臓器制御外科）、鈴木信夫先生（S47・環境影響生化学）。

学）。

一方、ゐのはな同窓会名誉会長 井出先生は佐久・臼田のご出身で昭和55年から平成15年までに9回、本部役員としてお祝辞いただき、なお懇親会では知人ぞ知る軽妙洒脱な源四郎節で、一同を魅了されるのが恒例となり、第56回総会で名誉会員に推戴いたしました。しかし残念なことに先生は病を得て平成20年11月28日に不帰の客となられ、平成19年に創刊された我々の会誌「亥之鼻 信州」の題字は先生のご遺墨となってしまいました。ここに紙面を借りてご冥福をお祈りいたします。

なお、歴代13名の同窓会会長のうち、初代会長の高橋信美先生（東大・上田）、第五代の花岡和夫先生（M44・諏訪）、第九代の小林金市先生（S6・岡谷）、第十一代の井出源四郎先生（S19・佐久）の4先生は、いづれも長野県のご出身であることを付記しておきます。

現状と今後のこと

さて、会員の高齢化が進む一方で、若い新入会員は殆どなく、会員数は盛期の150名前後から減少の一途をたどって、現在69名が長野・須坂地区の27名を含めて東北信地区に43名、残る26名が県下各地の地域医療に献身しているが、会員の減少は時代の趨勢とはいえ残念なことであり、会の将来が懸念される。さらに県下在住の数名の同窓生が入会を拒否しており、今後ゐのはな同窓会として考えてゆくべき問題と思われる。

また、昭和52年以来同窓会会則に准じて、「ゐのはな同窓会長野県支部」と呼称していたが、支部総会とゐのはな会報の他は、同窓会費納入だけの希薄な関係に鑑みて、平成12年の第55回総会で、会名を「信州ゐのはな会」に改称した。

同窓会の本筋を全うするためには、顔を見ながら会員間の頻回なコミュニケーションが必要であるが、経済的、時間的の制約で思うに任せない。そのメディアの一つとしての会誌の刊行にはなんとか漕ぎつけたが、ITの活用はいまいちで、他に有為な手段を見いだせないまま、同窓会費に地区会費の増加を上乗せするにしのびなく、年会費は据え置き、総会も3年ごとの開催として経費の有効運用に努めているが、物故会員の弔慰と3年ごとの総会費で会計に余裕はできない。従来の総会の形は先述のように、来賓の先生方に信州までご足労いただいて、謝恩の意味も含めて、親しく罄咳に接しておもてなしするという上下関係であり、総会に際して本部から

第4章 同窓の発展

「寸志」をいただき、支部としては先生方の面倒を全て見るのが風習となっていた。これらの経験によってかねてから、「里から寺へ」ばかりでなく、逆に全国ゐのはな会（本部）から地区会への積極的な働きかけ・支援の増加によって、地区会の活性化したエネルギーを、本部にフィードバックして、両者のより有機的な関係が強化されることを願っていた。

近時、信州ゐのはな会のさらなる充実を図るために、会誌を発行しようという気運が高まっていた。数年前からゐのはな同窓会の会計報告上で、地区会の活性化支援費なる名目で、全予算の10%近くが支出されていることを知って、本部に相談したところ、当会の年会費3年分に相当する額が支援されて、平成19年春、井出名誉会長・渡辺会長・唐沢日本医師会長のご寄稿をいただき、約半数の会員の投稿によって、質素ではあるが充実した「亥之鼻 信州」を刊行でき、宿願が叶えられた思いである。さらに今年度は2号の発行予定で、原稿募集が始まっている。

また、今年の総会にあたって、思いがけない活性化支援費の助成を受けることができ、千葉からの両

先生はいうに及ばず、初めて首都圏・信越地区の地区会に案内して、静岡の佐藤会長、東京から岡本理事のご参加をいただいて、盛大裡に総会を開催することができた。さらにまた、従来悩みの種であった千葉からの先生方の謝礼については、今回はじめて旅費日当が本部から直接先生方に支給されることになり、地区活性化支援の活動がより具体化されたのである。

このように、本部の地区会に対する支援強化の姿勢が、目に見えて来たことは大変嬉しく、これは今後の同窓会の一つの方向を示すことになるであろうし、積極的に推進して欲しいところである。また本部から遠く、疎遠になりがちな地区会員のハートを掴むために、同窓会活動の一端として、「医学関連の出前講座」を各地区で展開することも、有意と思われるので検討されるよう提案したい。

これらの支援活動に比例して地区から本部への信頼・支持と協力が増進し、「ゐのはな同窓会」がより活力がある組織へと成長して、高く羽搏くことを切に願って擱筆する。

（くまがい のぶお）